

インド：ヒンドゥー教徒が牛肉を食したことが判明した場合のペナルティーに関する情報

インドの「ヒンドゥー教徒が牛肉を食したことが判明した場合のペナルティー」に関する調査依頼に対し、難民研究フォーラムが規定の時間的制約の中で調査したところ、関連しうる情報として以下の情報が見つかりました。

略称：.....	1
1. ヒンドゥー教徒による牛肉の接種等の状況	1
2. 牛肉を食した場合の罰則等	3
3. 牛肉を食した（又は食したと疑われる）者の社会的な取扱い.....	5
参照：.....	9
(報告等)	9
(記事等)	10
(直接引用しなかった参照情報)	11

略称：

CSW	クリスチャン・ソリダリティ・ワールドワイド [Christian Solidarity Worldwide]
HRW	ヒューマン・ライツ・ウォッチ [Human Rights Watch]
OFPRA	フランス難民・無国籍庇護局 [Office français de protection des réfugiés et apatrides]
USCIRF	米国連邦政府国際宗教自由に関する委員会 [United States Commission on International Religious Freedom]

注：文中の下線は難民研究フォーラムによるものです。

1. ヒンドゥー教徒による牛肉の接種等の状況

ア [OFPRA「インド：ウシの神聖さ：政治的・社会的な影響」](#) (2017年5月5日)

1.3. 独立闘争の象徴としての牛肉

...

第一次インド独立戦争と呼ばれる 1857 年の大反乱「セポイの反乱」（英領インド軍の先住民兵士）は、英軍の弾薬の整備に牛脂や豚脂が使われているという噂が引き金となり発生した。確かに、当時発売された弾倉は、紙に包んで獣脂で防水し

ていた。それが牛脂や豚脂だと知ったヒンドゥー教徒とイスラム教徒の兵士らは、自分たちの信仰に対する侮辱とみなし、イギリス人将校に対して反乱を起こしたのだった [注 11]。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、ヒンドゥー教の独立運動家らは、ウシを食べる者、つまりヒンドゥー教徒の敵とされたイギリスとの闘いにおいて、ウシのイメージを利用したのであった。こうして、マラーター人でありながら宗教的少数派に対するヒンドゥー教徒の支配を公然と支持したティラクやサヴァルカル、さらには共同体を統合した穏健派のガンジーなどの政治指導者が、ウシに対する敬意を要求するようになったのである [注 12]。

1.4. 牛の肉、動物の皮革、不可触賤民

アンベードカルは、インド憲法の父の一人とされ、政治指導者であり、ダリット（不可触民、ハリジャン、「神の子」とも呼ばれる）とされるマハール族出身のマラーティー人であるが、不可触民と牛肉の摂取を結びつけて考えている。曰く、バラモンが牛肉を食べると、貧乏人はその値段のために買えなかった。しかし、前者がこの肉を手放すと、後者は唯一手の届く栄養価の高い食品として、この肉しか買えなくなったのである。さらに、ダリットは上位カーストの家畜の死体の処理と片付けの役割も担っていた。この二つ目は逆説的であるが、ダリットに課した活動そのものが、ダリットを見下すことになった。バラモン以外のヒンズー教徒が次第に肉、特に牛の肉を拒否するようになったのは、上層カーストの真似をして、下層カーストとの差別化を図るためであった [注 13]。

...

牛肉はイスラム教徒だけでなく、キリスト教徒や先住民族、ダリットと呼ばれるカースト外で経済的・社会的に虐げられたヒンドゥー教徒にも食されている [注 15]。

※ 原文フランス語。訳文は、DeepL.com（無料版）による訳文に一部修正を加えた仮訳です。脚注の詳細は原文をご覧ください。

イ 記事「[インドで菜食主義の暗黒面が際立つ](#)」Nikkei Asia（2022年1月12日）

...

ウシを屠殺した又は牛肉を食べたと疑われる人々を襲い、殺人さえするヒンドゥー教徒の暴徒らがいる。ベジタリアンか非ベジタリアンかは、もはや選択の問題ではなく、生死の分かれ目となり得る。

最も悪名高い自警団の事件は、2015年に起きたモハンマド・アクラクという農場労働者へのリンチ事件である。彼が牛を屠殺して牛肉を冷蔵庫に保管しているという噂が広まった後、殴られて殺害された。

その後、検査により、その肉はヤギの肉であることが確認された。この殺人に責任を負う者らは、殺人についてではなく、ヤギの肉を牛肉と間違えたことに反省の弁を述べている。このヒンドゥー教徒の暴徒らは、だれもがベジタリアンになるこ

とを望んでいるが、今のところ、命の危険を感じる必要があるのは牛肉を食べる者だけである。

...

アクラク殺害事件後にインド・ビジネス紙 Mint が公表した政府データによると、120 万人以上のヒンドゥー教徒を含む約 8,000 万人のインド人が牛肉を食する。家畜と水牛（ウシ亜科に属する）の売買は、数百万人の生計を支えている。

...

ウ [記事「私はヒンドゥー教徒であり、私の権利として牛肉を食す。」 - カルナタカ州を管轄する AICC 事務局長が、憲法はすべてのインド人に食事を選ぶ自由を保証していると発言](#) The Hindu (2018年1月11日)

「ヒンドゥー教のアイデンティティ」とそれが内包するものが、下院選挙を間近に控えたカルナータカ州で中心的な位置を占めるようになってきた。州首相のシッダラマイヤー [Siddaramaiah] 氏は最近、自らを「本物のヒンドゥー」と呼び、野党 BJP のヒンドゥー教に対する概念に疑問を呈したが、ウッタル・プラデーシュ州首相のヨギ・アディツアナス [Yogi Adityanath] 氏は、彼の主張が本当に真実であるなら牛肉を禁止しろと挑発した。カルナータカ州を担当する全インド会議委員会 (AICC) 事務局長の K・C・ベヌゴパル [K.C.Venugopal] 氏は、ビジャヤプラ [Vijayapura] を訪問時に牛肉禁止の要求を含む様々な問題について The Hindu の取材に応じた。

...

Adityanath 氏は、最近の訪問の際、Siddaramaiah 氏について、彼はカルナタカで牛の屠殺を禁じていないので、彼は本物のヒンドゥー教徒ではないと述べた。あなたの意見は？

インド憲法は、すべてのインド人に食事を選ぶ自由を保証している。かなりの相当数のインド人が牛肉を食す。私はヒンドゥー教徒であり、牛肉も食べます。これは私の権利です。北東部の諸州では、BJP が進出しようとしています、牛肉は彼らの食卓に欠かせないものの一つです。

...

2. 牛肉を食した場合の罰則等

宗教／宗派に関わらず、インドの多くの州において、牛の屠殺、輸送及び販売が法律で制限又は禁止されており、更に一部の州では消費も禁止されています。

ア [USCIRF「国別アップデート：インド - インドの宗教の自由の状況」](#) ecoi.net (2022年11月)

牛屠殺禁止法

ヒンズー教では、ウシは神聖なものとされている。インド憲法第48条は、国家に「成牛や子牛の屠殺を禁止する…措置をとる」ことを命じている。インド28州のうち20州は、ウシの輸送や販売を禁止する食肉政策を通じて、さまざまな形でウシの屠殺を犯罪としている。これらの法律は、教義において牛肉を食べることを禁止していないキリスト教、イスラム教、ダリットやその他の先住民族などの宗教的マイノリティに対して適用されることが多い。2021年と2022年には、ジャンム・カシミール州、トリプラ州、ラジャスタン州、ビハール州、ウッタル・プラデーシュ州及びデリーにおいて、ウシの密輸や屠殺の疑いを巡って死傷者を出した暴力事件が報告されている。2022年8月には、ラジャスタン州のBJPメンバーで元州議会議員のギャン・デヴ・アフジャ [Gyan Dev Ahuja] が、「ウシの虐殺に関わる者は殺せ」と公然と奨励し、「我々はこれまでに5人を殺した」と述べて、同地域における牛虐殺の疑いでイスラム教徒男性がリンチ殺人したことを暗示したことが報告されている。

イ 米国国務省「[宗教の自由に関する国別報告 2021年 インド](#)」(2022年6月2日)

28州のうち25州が牛の屠殺に一部または全面的な制限を課している。罰則は州によって異なり、成牛か、子牛か、雄牛か、雌牛かのいずれであるかによって異なる場合がある。この禁止令は、イスラム教徒や、伝統的に牛肉を消費する指定カースト・指定部族の構成員に主として影響を与えている。ウシの屠殺が禁止されているほとんどの州では、6ヶ月以上2年以下の禁錮刑および1,000ルピー以上1万ルピー以下(13ドルから130ドル)の罰金という罰則がある。アッサム州政府が新たな法律を制定した8月以降、ウシの屠殺、消費又は輸送を行った場合、裁判前の保釈は認められず、3年以上の禁錮刑か30万乃至50万ルピー(4,000~6,700ドル)の罰金、またはその両方が科せられる。カルナータカ州では2月以降、13歳以上の水牛を除くすべての牛の屠殺が違法となり、違反者には3年以上7年以下の禁錮刑と50万乃至100万ルピー(6,700ドル~13,500ドル)の罰金が科される。ラジャスタン州、パンジャブ州、ハリヤナ州、ヒマーチャル・プラデーシュ州およびジャンム・カシミール州では、牛の屠殺に2年以上10年以下の禁錮刑を科している。グジャラート州の州法では、牛の殺処分、牛肉の販売、牛や牛肉の不法な輸送について、10年以上の禁錮刑を義務付けており、最高で終身刑となる。

ウ OFPRA「[インド：ウシの神聖さ：政治的・社会的な影響](#)」(2017年5月5日)

2.1. インド憲法

動物の屠殺の規制に関する参照条文は、インド憲法第48条である。この条項は、国は、現代科学的かつ科学的な根拠に基づいて農業及び畜産を組織するよう努め、特に、品種の保存及び改良のための措置をとること、並びに成牛及び子牛、その他の乳牛及び役牛の屠殺を禁止するための措置をとることを規定している [注16]。

2.2. 州別の法令

インドの各州では、全面的または部分的な禁止や、ウシの屠殺の基準について、法律が異なっている。以下は、最も緩やかなものから最も厳しいものまで、各地で適用されている措置の内容である [注 17]。

伝統的な部族州であるアルナチャル州、ミゾラム州、メガラヤ州、ナガランド州、シッキム州の各州では、屠殺を禁止していない [注 18]。

水牛を女神カーリーに捧げるという文化が根付いており、バングラデシュ誕生以前には英領インドで 2 番目に大きなイスラム教徒コミュニティが住んでいたベンガル州では、成牛、子牛、雄牛、水牛の年齢や種類に関係なく屠殺に制限を課していない。しかし、当該の動物が 14 歳以上であり、労働や繁殖に適さない、あるいは年齢、怪我、奇形、不治の病により労働や繁殖に永久に適さないことを明記した「食肉用適合証明書」の発行が必要となっている。違反者は、6 ヶ月以下の禁錮刑および／または 1,000 ルピー [14 ユーロ] 以下の罰金に処される [注 19]。

...

※ 原文フランス語。訳文は、DeepL.com (無料版) による訳文に一部修正を加えた仮訳です。脚注の詳細は原文をご覧ください。

3. 牛肉を食した (又は食したと疑われる) 者の社会的な取扱い

ウシの保護の名目において、牛肉の売買や消費 (又はその疑い) への私刑として、特にイスラム教徒やカースト外ヒンドゥー教徒のダリットに対し、ウシ自警団による攻撃が増加していると報告されています。

ア CSW [「一般報告:インド」](#) (2022年3月22日)

異なる集団間の暴力

...

ウシの保護および牛肉を食した疑いに対する罰としての暴徒らによるリンチ事件が、頻繁に報告されている。調査が示すところでは、2016年から2020年までの間に、牛の屠殺と売買に関連したリンチにより、50人以上の死傷者が出ている。地域の監視グループは、暴徒らによる私刑を引き起こしたとして、特にウッタル・パラデーシュ州首相のヨギ・アディツアナス [Yogi Adityanath] など BJP メンバーを批判している。攻撃の圧倒的大部分は、イスラム教徒とダリットの地域住民に対して行われている。

...

イ CSW [「キリスト教徒7人が牛自警団員らに辱められ、殴打される」](#) (2020年9月28日)

回答:インド 2022 年 12 月 29 日

…

2005 年のジャールカンド州ウシ亜科動物屠殺禁止法の下、ウシを屠殺することは刑事犯罪となっている。この法律に違反した場合、最高で 10 年の禁錮刑および 1 万インドルピー（約 107 ポンド）の罰金に処される。2014 年 5 月にバラティヤ・ジャナタ党 (BJP) 政権が発足して以来、ウシの保護の名目や牛肉を食した疑いを理由に暴徒らによるリンチを受ける事件が増加している。

…

ウ Bertelsmann Stiftung [「BTI 国別報告 2020 年版 - インド」](#) ecoi.net (2020 年 4 月 29 日)

1 | 国家性

…

しかし、本報告の調査期間中に、ヒンドゥー教民族主義政党のバラティヤ・ジャナタ党 (BJP) のナレンドラ・モディが主導する政府の側で、ヒンドゥー教多数派文化の確立をほのめかす兆候がさらに強まった。2017 年 3 月、BJP はヒンドゥー教の司祭で強硬なヒンドゥー教民族主義者であるヨギ・アディツアナス [Yogi Adityanath] をインドで最も人口の多いウッタル・プラデーシュ州の州の州首相に任命した。本報告の調査期間中、牛肉を消費または輸送した疑いのある人々の殺害が数件行われたほか、いくつかの州においてウシの屠殺禁止を含む「牛の保護」法が強化された。

…

10 | 福祉体制

…

イスラム教徒やいわゆる指定部族の構成員に対する差別は、近年悪化している。イスラム教徒は長きにわたって社会から周縁化されてきたが、最近の調査によると、彼らの世代間の上昇社会移動は、過去 20 年間で大きく減退している。現政権下において、イスラム教徒 (およびダリット) は、ヒンドゥー教徒自警団による牛肉の消費者や取引業者に対する暴徒襲撃の犠牲者となっている (とされる) 件数が増加している。…

…

エ HRW [「インドの暴力的なウシ保護 - 自警団らがマイノリティを攻撃」](#) (2019 年 2 月 1 日)

概要

…

バラティヤ・ジャナタ党 (BJP) のメンバーらは、2014 年 5 月に国政レベルで政

権を獲得して以来、牛肉の消費とそれにつながるとみなされる人々に対する暴力的な自警キャンペーンに拍車をかけるような異なる集団間のレトリックをますます用いるようになってきている。2015年5月から2018年12月にかけて、インドの12の州で少なくとも44人（うち36人はイスラム教徒）が殺害された。同じ期間に、20州にわたる100以上の異なる事件で、約280人が負傷した。

...

I. インドにおけるウシ保護の政治

...

2014年にBJPが政権をとって以来、牛肉や関連製品の消費と輸送をめぐるなど、宗教マイノリティ等のマイノリティに対する言辞が増加した。あるレポートによると、2014年から2018年にかけて、選出された指導者らによる憎悪と分断の言葉の使用は、BJP政権になる前の5年間と比較して約500%増加し、そのうちの90%がBJPの指導者らによるものであった。[注7]

...

※ 脚注の詳細は原文をご覧ください。

オ OFPRA [「インド：ウシの神聖さ：政治的・社会的な影響」](#) (2017年5月5日)

3.1. ヒンドゥー教過激派の台頭

...

こうしたダリットに訴えかけるため、ヨギは「ヒンドゥー・ユヴァ・ヴァーヒニー（ヒンドゥー青年軍）」という、低カーストやカースト外のヒンドゥー教徒にも門戸を開くと主張する過激派運動を立ち上げた。しかしながら、この運動の主な活動は、他の宗教からヒンドゥー教への（再）改宗（「ガール・ワプシ」、帰郷）、宗教間結婚の反対運動（「ラブ・ジハード」）、ウシの保護（「ガウ・ラクシャ」）である。これらの活動は、しばしば暴力を伴っている。さらに、この運動によってダリットに対する差別がなくなることもない。この運動によって利用されて、イスラム教徒を攻撃するように扇動されることもある [注45]。ヒンドゥー・ユヴァ・ヴァーヒニーは、ダリットをキリスト教に改宗させているとして、牛肉消費者であるキリスト教徒も攻撃している [注46]。

...

3.3. 脅迫と差別の道具としての牛

BJPが支配する地方での動物保護法、特にウシに対する規制強化は、わずかな抗議でも非難されるダリットやイスラム教徒を威嚇するための動きと解釈されている。

ウシの保護となると議論はすぐに燃え上がり、2015年10月にカシミール地方で起こったように、まさに立法議会の議会内で選出された議員同士の乱闘にさえも

発展することがある。

その1カ月前、ウッタル・プラデーシュ州では、イスラム教徒の男性が牛肉所持の冤罪で暴徒に石打され、彼の息子は負傷した。加害者のうち6人が逮捕された。フランス語、英語、タミール語の公的な情報源で調べたところ、逮捕された者の状況について信頼できる情報は見つからなかった。被害者の家族が、禁止されている食肉を所持していたとして、立件された。しかし、州高等裁判所は、捜査終了まで家族の逮捕を禁じている。被害者から押収された肉は、研究所に到着すると不思議なことに重量が2倍になっていたという。最初の調査結果は、「牛肉である」ということだった。ウシを殺した罪で起訴された被害者の兄が逮捕された。しかし、一家は自分たちが食べたのは羊の肉だと主張を続け、その後の調査でそれが確認された。

他にも、牛肉を屠殺したり、屠殺のために輸送したり、食べたりしたことで非難された人々に対する暴力や襲撃事件が数件起きている。被害者は多くの場合にはイスラム教徒かダリットであり、女性も含まれる。犯人はヒンドゥー教の過激派である。警察は、指定カースト及び指定部族（残虐行為防止）法（低カーストやダリットの出身者を、出自を理由とする迫害から守るための法律）などに基づき、あるいは暴行を扱う従来の法律に基づいて犯人を起訴している。

犯人は過激派組織「インド牛保護戦線（Bharatiya Gau Raksha Dal／BGRD）」に所属している。そのメンバーは「ガウ・ラクシャク」（「牛を守る者」と呼ばれている。主にデリーやハリヤナ州を拠点としている [注 58]。彼らは、一般にサング・パリバル（「組織の家族」と呼ばれる過激派やヒンドゥー民族主義運動に参加している。彼らのスローガンのひとつに「Gau mata ka apman, nahin sahega Hindustan」（DIDR [ヒンディー語]:「母牛の屈辱、インドは耐えられない」というのがある。

2017年4月、イスラム教徒の男性が、食肉用の牛を違法に輸送していると訴えたBGRDのメンバーによって殴り殺される事件が発生した。ガウ・ラクシャクは、牛の輸送に使われそうな道路を頻繁にうろつき、牛を手荒に扱う。いくつかの州でBJPが相次いで政権を獲得したことが、こうした民兵を後押ししているようだ。

ガウ・ラクシャクなどのヒンドゥー教過激派は、従来から弱者が敵対視しているダリットや宗教的マイノリティに加え、牛肉消費を支持する意見をソーシャルネットワークに書き込む人を躊躇なく攻撃している。インターネット上で嫌がらせや脅しをしている。あるインドの有名女優は、パーティーの席で提供された肉が牛の肉ではなく水牛の肉であったことを弁明することを余儀なくされた [注 61]。

...

※ 原文フランス語。訳文は、DeepL.com（無料版）による訳文に一部修正を加えた仮訳です。脚注の詳細は原文をご覧ください。

カ [記事「ウナ、アルワルとデリーのウシ自警主義：2015年のダドリ・リンチ事件以降の「ガウ・ラクシャク」による攻撃一覧」Firstpost（2017年4月24日）](#)

マディヤ・プラデーシュ州の男女への攻撃

2016年1月、マディヤ・プラデーシュ州ハルダ地区のカーキヤ駅で、イスラム教徒の男女を含む複数の乗客が、牛肉を持っているという疑惑でウシ保護団体に襲撃される事件が発生した。

モハマド・アクラクが牛肉を保存しているという噂が立ち、殺されたダドリでの事件と同様に、袋の中で見つかった肉片は「検査」のために研究所に送られ、その結果、水牛の肉であることが判明した。

警察は、ガウラクシャ・シャミティ [Gauraksha Samiti] の活動家2名を、意図的に負傷させ、犯罪的脅迫をしたとして事件登録し、逮捕した。

キ 記事「[牛肉を食べた場合の「贖罪」はどこでも可能と元僧侶が語る](#)」News Views (2019年3月14日)

ニュージーランド・ハミルトンの地域ニュースサイトの News Views は、誤って牛肉を食べたヒンドゥー教徒男性の事件を受け、2019年3月の記事で、ある元僧侶の見解として、次の通り記載している。

...

「ヒンズー教では、ウシは神聖な存在であるため、牛肉（宗派によっては肉類全般）を食べることは禁じられています。しかし、私の個人的な見解では、もし、海外を訪れたり、滞在したりして、知らず知らずのうちに、何の意図もなく牛肉を食べてしまったら、最良の方法は、近くのヒンドゥー寺院を訪れ、神に許しを請い、その罪のために自分の代わりに祈りを捧げてもらう (kshma yaachna) ことです」とカウシク氏は語った。

「過ちを認め、決意を固め、許しを請うことで、そのような罪は洗い流されると、海軍退役軍人でもあるカウシク氏は付け加えた。

...

参照：

(報告等)

クリスチャン・ソリダリティ・ワールドワイド (CSW) 「General Briefing: India (一般報告：インド)」(2022年3月22日)、オンライン：<https://docs-eu.livesiteadmin.com/dc3e323f-351c-4172-800e-4e02848abf80/general-briefing-india-apr22.pdf>

「Seven Christians humiliated and beaten by cow vigilantes (キリスト教徒7人が牛自警団員らに辱められ、殴打される)」(2020年9月28日)、オンライン：<https://www.csw.org.uk/2020/09/28/press/4819/article.htm>

ヒューマン・ライツ・ウォッチ (HRW) 「Violent Cow Protection in India - Vigilante

Groups Attack Minorities (インドの暴力的なウシ保護 - 自警団らがマイノリティを攻撃)」(2019年2月1日)、オンライン:

https://www.hrw.org/sites/default/files/report_pdf/india0219_web3.pdf

フランス難民・無国籍庇護局 (OFPRA) 「La sacralisation de la vache : conséquences politiques et sociétales (インド: ウシの神聖さ: 政治的・社会的な影響)」(2017年5月5日)、オンライン:

https://www.ofpra.gouv.fr/libraries/pdf.js/web/viewer.html?file=/sites/default/files/ofpra_flora/1705_ind_la_sacralisation_de_la_vache.pdf

米国連邦政府国際宗教の自由に関する委員会 (USCIRF) 「Country Update: India – Religious Freedom Conditions in India (国別アップデート: インド - インドの宗教の自由の状況)」(2022年11月)、オンライン:

<https://www.ecoi.net/en/file/local/2082764/2022+India+Country+Update.pdf> [ecoi.netに収録]

米国国務省 「2021 Report on International Religious Freedom: India (宗教の自由に関する国別報告 2021年 インド)」(2022年6月2日)、オンライン:

<https://www.state.gov/reports/2021-report-on-international-religious-freedom/india/>

Bertelsmann Stiftung 「BTI 2020 Country Report – India (BTI 国別報告 2020年版 - インド)」ecoi.net (2020年4月29日)、オンライン:

https://www.ecoi.net/en/file/local/2029407/country_report_2020_IND.pdf [ecoi.netに収録]

(記事等)

Firstpost. 「Una, Alwar and Delhi cow vigilantism: A list of 'gau rakshak' attacks since 2015 Dadri lynching (ウナ、アルワルとデリーのウシ自警主義: 2015年のダドリ・リンチ事件以降の「ガウ・ラクシャック」による攻撃一覧)」(2017年4月24日)、オンライン: <https://www.firstpost.com/india/una-alwar-and-delhi-cow-vigilantism-a-list-of-gau-rakshak-attacks-since-2015-dadri-lynching-3401302.html>

Nikkei Asia 「India highlights dark side of vegetarianism - Cow protection campaign by vigilante ideologues threatens safety of beef eaters (インドで菜食主義の暗黒面が際立つ - イデオロギー的自警団による牛保護運動が牛肉を食す者らの安全を脅かす)」(2022年1月12日)、オンライン: <https://asia.nikkei.com/Editor-s-Picks/Tea-Leaves/India-highlights-dark-side-of-vegetarianism>

Hindu, The 「‘I am a Hindu and I eat beef; it’s my right’ - AICC general secretary in charge of Karnataka says the Constitution gives every Indian the freedom of choice in food (「私はヒन्दゥー教徒であり、私の権利として牛肉を食す。」 - AICC のカルナカタ支部事務局長が憲法はすべてのインド人に食事を選ぶ自由を保証していると発言)」(2018年1月11日)、オンライン:

<https://www.thehindu.com/news/national/karnataka/i-am-a-hindu-and-i-eat-beef-its-my-right/article22423390.ece>

(直接引用しなかった参照情報)

Business Standard 「Hindu beef eaters are speaking out, and more are joining their ranks」 (2015年10月7日)、オンライン : https://www.business-standard.com/article/current-affairs/hindu-beef-eaters-are-speaking-out-and-more-are-joining-their-ranks-115100600751_1.html

Indian Express (quotidien indien de langue anglaise), “ Kajol clarifies her ‘beef lunch’ video: ‘What was shown was buffalo meat that is legally available’”, 01/05/2017、<https://indianexpress.com/article/entertainment/bollywood/kajol-video-beef-dish-clarification-4635827/>

News Views 「‘Atonement’ for eating beef can be done in any temple, says ex-priest」 (2019年3月14日)、オンライン : <https://www.newsviews.co.nz/atonement-for-eating-beef-can-be-done-in-any-temple-says-ex-priest/>

News 18 「After Mistakenly Eating Beef, Hindu Man in NZ Wants Store to Fund 'Cleansing' Trip to India」 (2019年3月13日)、オンライン : <https://www.news18.com/news/buzz/after-mistakenly-eating-beef-hindu-man-in-nz-wants-store-to-fund-cleansing-trip-to-india-2064739.html>

Time of India 「Opinion: A beef-eating Hindu demands his right」 (2015年10月5日)、オンライン : <https://timesofindia.indiatimes.com/blogs/Swaminomics/a-beef-eating-hindu-demands-his-rights/>